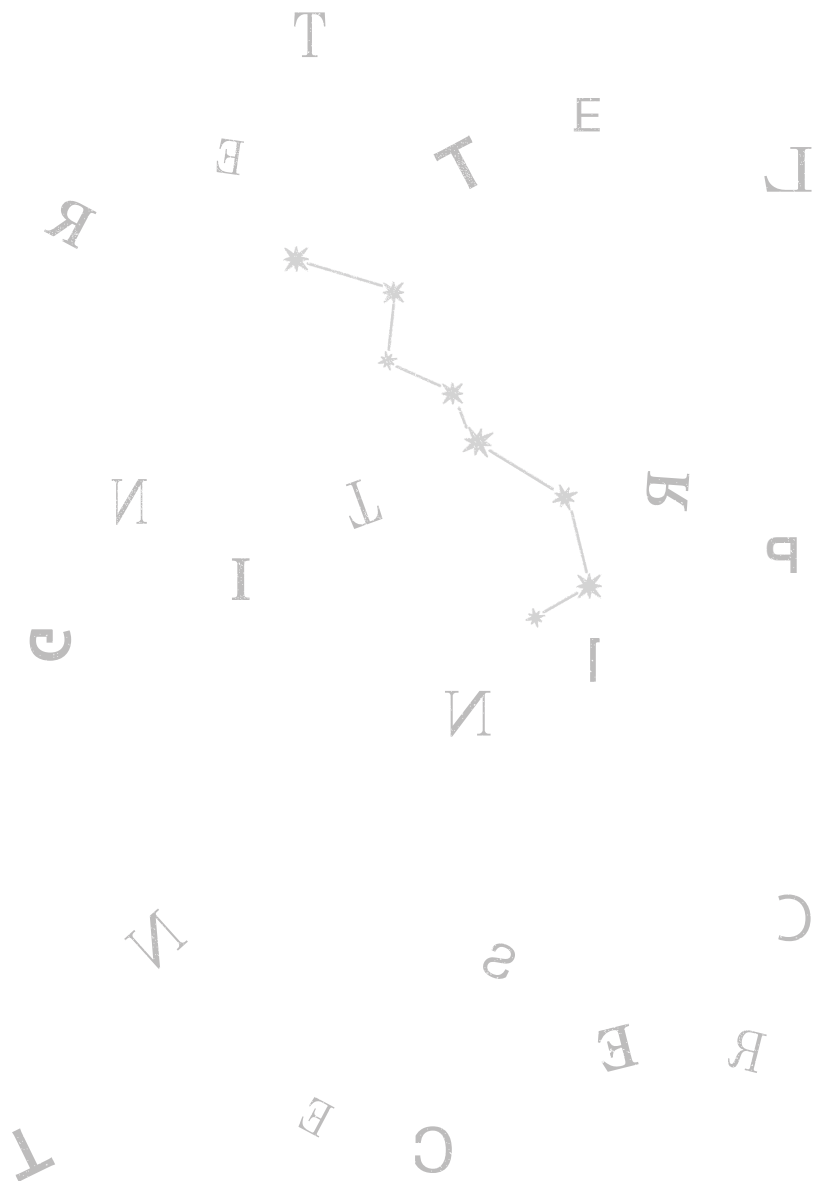


# Contents

|                                |       |     |
|--------------------------------|-------|-----|
| 世界は森                           | ..... | 5   |
| 八月のコースター                       | ..... | 78  |
| 星たちの葉 <small>しほ</small>        | ..... | 137 |
| ひとつだけの活字                       | ..... | 217 |
| 活版印刷 <small>かっはん</small> をいつまで | ..... | 312 |



世界は森



扉写真撮影 帆刈一哉  
扉写真撮影協力 九ボ堂



仕事が終わりに、ロッカールームでトレーニングウェアに着替える。

「ハルさん、支度できましたか？」

ドアの外から、柚原さんの声があった。先に仕事をあがって、すでに着替えていたらしい。長い髪を仕事のときより高い位置で結んでいる。ジョギングのときはいつもそつだ。はじめて見る赤と紫の柄のウィンドブレーカーに目を奪われた。

「あれ、柚原さん、そのウェア、もしかして新しい？」

「はい。この前、買ったんですよ。ジョギングもだんだん習慣になってきたし、やっぱりいいものじゃないかな、って」

「いいじゃない、すごく素敵」

「そうですか？ へへへ」

柚原さんは背が高い。三十代後半だが、スタイルもいいし、二十代に間違えられそうなくらい若い。いつもおしゃれで、モデルさんみたいだった。

わたしが働いているのは川越運送店一番街営業所。川越観光の中心、一番街に面

している。蔵造りの町並みのなかにあり、うちの店の建物も蔵造りだ。創業者がもとも明治創業の米問屋で、店をたたんだあと、運送店をはじめたらしい。市内限定だが、全国配送の運送会社より安く早くて小回りがきく、ということ、けっこう繁盛している。

数年前から、同じ建物に川越観光案内所が同居するようになった。週替わりで川越のお店の品物を紹介するアンテナショップを兼ねたコーナーで、柚原さんはそちらのスタッフなのだ。英語が堪能で、ここ数年びつくりするほど増えた外国人観光客の対応は、柚原さんがひとりでごなしている。

シューズの紐を結び、外に出る。観光案内所のバイトの大西くんもいた。大学院生の線が細い男の子だ。流行りの草食系ってやつですかね、と柚原さんが言っていた。写真を撮ったりパソコンで文章を書いたり、が得意らしく、観光案内所のブログも大西くんが運営し、なかなか好評みたいだ。

「この時間になると、人、いないですね」

柚原さんが言った。三月にはいって少しずつ日は長くなってきたが、六時過ぎればもう暗い。昼間は観光客でにぎやかな川越の街も、この時間になるとあまり人がいなくなる。



三人で「時の鐘」の前まで行くと、葛城さんももう来ていた。四十代はじめて、ガラス店兼工房を経営している。自作のガラス細工を販売しながら、観光客向けのガラス細工の体験工房も開く人気店だ。

「お、柚原さん、ウェア、似合ってますね。さすが、一番街のマドンナ」

葛城さんがよく通る声で言って、がはは、と笑った。

「やめてくださいよ……。マドンナって、いつの時代の話ですか」

葛城さんがむかしのマドンナの曲を歌いだすと、柚原さんがげんなりしたような顔になった。モデルさんのような外見だが、柚原さんはさばさばした性格で、なんだかんだ言いながら、葛城さんとも妙に気が合っている。飲みに行つては、ふたりでカラオケで歌いまくっているらしい。

「じゃあ、走りますか」

少しストレッチをしたあと、葛城さんが言った。

時の鐘から鐘つき通りを通って三芳野神社を抜け、川沿いにぐるりとまわる。合計六キロ。最近定番のコースだ。

このメンバーで走るようになって、三ヶ月になる。はじめはわたしひとりだった。

ここ数年の運動不足のせいでかなり太ってしまったのだ。これでは息子の卒業式、入学式るとき、スーツがはいらない。それで仕事のあとに走ることにした。

しばらく続けていると、柚原さんが、わたしもいっしょに走りたい、と言いだした。そのうち葛城さんもメンバーに加わり、柚原さんが大西くんを誘って……というわけで、いつのまにか四人になっていた。

「ところで、森太郎くん、大学合格したそうですね。おめでとつございます」

走りながら葛城さんが言った。

「森林科学科でしたっけ？ すごいなあ、自分の道をちゃんと決めてるなんて」

柚原さんが感心したように言う。

「そんなたいそうなことじゃ、ないんだけど……」

照れ笑いしながら答えたが、実のところ、この件に関しては、わが息子ながらあつぱれだと思っていた。

わたしの息子・森太郎は、むかしから山が好きだった。小学校からなんども登山に行き、高校でも登山部にはいった。

大学進学希望を決めるときも、いつのまにか森林科学科を選んでいた。もちろん東京ではない。北海道大学だ。高校の部活で行った北海道の山で、北大の山岳部



の人たちと知り合い、その山岳部にはいりたいと思ったのも志望の動機のひとつのようだ。将来は自然保護官の仕事に就きたいと思っているらしい。

「立派ですよ。わたし、大学を決めるとき職業のことなんて全然考えてませんでした。四年間遊ぶ……っていうか、いろいろ体験したい、ってだけで……」

柚原さんが言った。

「いまの若い子もっとまじめなんだ。俺らのころとは全然違うんだって」

「俺ら、って……いつしよにしないでくださいよ。年、全然違うじゃないですか」

葛城さんの言葉に柚原さんが憤然と答える。

「ともかく、目的を持って大学を決めるのは立派ですよね」

大西くんが言った。

「それに、森林科学科、ってどこも素敵じゃないですか」

柚原さんが夜空を見上げた。

「まあ、ハルさんはちよっとさびしいかもしれないけどな」

葛城さんがからかうような口調で言う。

「そんな……いままで大変だった分、羽をのびますよ」

ははは、と笑いながら言った。

「またまた、無理しちゃって」

葛城さんがぼんぼんとわたしの肩を叩いた。

たしかに、夫が死んでからずっとふたりで暮らしてきたのだ。森太郎がいなくなったらひとり暮らし。でも、さびしいのかと訊かれても、まだ想像もつかない。これまでだって、合宿や修学旅行で森太郎が家にいないことなんて、いくらでもあった。だけど……。

大学に行けば四年は帰ってこない。そのまま就職して、ここにはもう戻らないかもしれない。つまり、いつしよに暮らすのはあと一ヶ月もないということだ。

え？ 一ヶ月？ 急にその数字が現実として迫ってきて、立ち止まりそうになった。この前までは入試の合否で頭がいっぱいで、それどころじゃなかったのだ。

「まずいまずい、ハルさんがしゃべらなくなっちゃったよ」

葛城さんがこっちの顔をうかがってくる。

「それって、葛城さんのせいじゃないですか」

柚原さんが葛城さんをにらむ。

「大丈夫ですよ、森太郎くんはお母さん想いですし、ハルさんだってこれからまた別のステージがはじまるんですよ。いろいろできるじゃないですか。ねえ」



特装版

# 活版印刷 三日月堂

ほしおさなえ

星たちの葉

店主が亡くなり、長らく空き家になっていた川の印刷所・三日月堂。店主の孫娘・弓子が川越に帰ってきたことで営業を再開するが、弓子もどつやら事情を抱えているようだ。

特装版

# 活版印刷 三日月堂

ほしおさなえ

海からの手紙

小さな活版印刷所「三日月堂」には、今日も悩みを抱えたお客がやってくる。店主の弓子が活字を拾い、丁寧に刷り上げるのは、誰かの忘れていた記憶や、言えなかった想い……。



装画：中村至宏



Letter Press  
Printing  
Crescent

特装版

# 活版印刷 星たちの葉 三日月堂

2020年4月 第1刷発行

著者 ほしおさなえ  
発行者 千葉均  
編集 森潤也  
発行所 株式会社ポプラ社  
〒102-8519  
東京都千代田区麹町4-2-6  
電話 03-5877-8109 (営業)  
03-5877-8108 (編集)  
ホームページ [www.poplar.co.jp](http://www.poplar.co.jp)  
印刷・製本 中央精版印刷株式会社  
装画 中村至宏  
ブックデザイン 斎藤伸二 (ポプラ社デザイン室)

©ほしおさなえ 2020 Printed in Japan  
N.D.C.913/315p/20cm  
ISBN 978-4-591-16565-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。  
小社（電話0120-666-553）にご連絡ください。  
受付時間は、月～金曜日 9時～17時です（祝日・休日は除く）。  
読者のみなさまからのご便りをお待ちしております。  
いただいたご便りは著者にお渡しいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

P4157001

本書は2016年6月にポプラ社より刊行されたポプラ文庫『活版印刷三日月堂 星たちの葉』を特装版にしたものです。

